

君の夢プロジェクト

今年度も中学生を応援する君の夢プロジェクトが行われました。吹奏楽部は、吹奏楽コンクールに向けた合奏指導。剣道部は、北海道警察機動隊へ出向き稽古を受けました。



吹奏楽部編



吹奏楽部の君の夢プロジェクトは、世界で活躍するクラリネット奏者の藤井一男氏によるクラリネットパート指導と合奏指導が行われました。藤井氏からはじめにクラリネットという楽器を志した理由が話されました。野球少年だった藤井氏が友達のクラリネットを吹いた時に受けた衝撃で「これで一番になる」と決意したことや、これまでの音楽活動の経験談に生徒たちは真剣な表情で聞き入っていました。



楽器の点検の後、パート指導が始まりました。藤井氏が奏する音色に会場が引き込まれます。強く優しい音が消える瞬間まで響き続け、その後の余韻と静寂の美しさに会場が静まりかえりました。クラリネットパート3人の音階などを聴き、一人ひとりに合った指導をする藤井氏。「キーの押さえる力」と「指の運び」を特に指導していました。指導のとおり、キーをしっかりと押さえることで音は太く、力強い音へと変わりました。パート練習の最後には、手と足でリズムを刻む練習を全員で行い、午前中のレッスンは終了。午後からは体育館に会場を移し、8月5日に行われる吹奏楽コンクールの演奏曲の指導が行われました。細かなリズムの頭のズレや同じメロディーを演奏する楽器同士の確認など、音をそろえることの大切さや曲全体を通してのアレンジなどを加えていただき、メリハリのある音楽が仕上がりました。藤井氏は「18人の部員では音量的にどうしても大人数に負けてしまうので、それとは違う味が必要。個人から能力を引き出してあげることが大切。子どもたちはちょっとしたアドバイスで音が変わる。可能性は無限大。指導者として自分があきらめたら、子どもたちも終わってしまう。求め続けることで、子どもも変わる。シャイな子どもたちが多いが、前向きに一步踏み出せば格段に上達する。技術的な能力が高い子もいるし、中学校には良い指導者がいるので、これからの成長が楽しみ」と話されました。顧問の村山先生も「4月から音が変わったと感じている。素直な音を出す子どもたちばかりなので、これからの成長が楽しみ」と期待しています。

練習の最後に藤井氏は「全道大会に行くことは奇跡。けれども、金賞まではあと一息。もう一度、これまで練習してきたことを頭に入れて、先生を信じてついていってほしい。最大限の努力をして、みんな力を合わせて歴史を変えよう」と生徒たちにエールを送りました。練習を終え、部長の福井菜々さん(3年)は、「藤井

先生の指導を受けて、クラリネットの音がとても変わったことに驚きました。これまで、リズムの頭がそろわないところがありませんでしたが、パートごとに細かく教えていただいたので、自分たちの演奏を見直すことへとつながりました。とても楽しかったです」と話しました。

いる生徒たちの姿がとても印象的で、それに呼応して音が豊かに響き、聴かせる音楽へと変化する様子が感じられました。コンクールの結果は「銀賞」となりましたが、とても大きな成長がみられました。この経験を糧に、さらなる夢に向かって進むことを期待しています。



剣道部編



剣道部の君の夢プロジェクトでは、北海道警察機動隊剣道部による稽古及び指導が行われました。

比布中学校剣道部員5人は、緊張した面持ちで札幌にある北海道警察機動隊庁舎の門をくぐりました。5人を出迎えてくれたのは、北海道警察本部機動隊剣道特練の監督である波間英雄さんです。



波間さんは、平成17年から6年間道警旭川方面本部に勤務。旭川方面本部道場では、月1回、七段以上の者による稽古があり、故松本明正先生から「警察の指導者として八段を目指して修行しなさい」といわれていたとのこと。その当時は、まだ30代で無理なことと思っていたそうですが、松本先生から会うたびに八段を意識させるような助言をいただき、上を目指していることと決意。そして、昨年11月の審査で見事八段に合格されました。

午前中は、その波間監督ら剣道特別訓練員による指導と、午後からは機動隊員らの試合稽古を見学しました。門脇摩皇さん(1年)は「気合いの入った発声、力強い打突、踏み込み、連続技、返し技のすごさに驚かされました。今の自分には到底できない素晴らしい剣道をさせていて、自分もこのような剣道をしたかと思いましたが」と感想を述べました。久保田夏生さん(1年)は、「私はまだ初心者ですが、ほんの少しでもみなさんの動きに近づけるようにたくさん稽古を重ねて頑張りたいです。とてもきつくて大変でしたが、教えていただいたように打ったら、とても褒めてくれてうれしかったです。今回の稽古で、自分の欠点や課題を見つけることができました。それを意識して練習したいと思います。波間先生から『正しい打ち方をしなきゃ上手にならない。うその打ち方では何も意味がない』と言われました。その言葉と今回の稽古を忘れずに、たくさん練習を重ねて大会では良い結果を残せるように精一杯頑張りたいです」と課題を見つめ直し、今後の抱負を語ります。



堺七虹さん(1年)は、「素振りをする時、目の前で先生方の素振りを見て、私の素振りは緊張感の無い体操の素振りだと感じ、これからの稽古ではしっかりと試合を意識した素振りをしたい。さらに面の外し方について、私は今まで顔を拭いてから面の中を拭いていましたが、本当は面の中を一番先に拭くということを知り、一つ一つの所作にはすべて意味があると教えていただき、次の稽古からは心掛けたと思います」と改めて所作の大切さを学びました。今回のプロジェクトで教えていただいたことを生かし、上位入賞を目指して、これからも剣道を続けて欲しいと思います。